生徒向け校長通信 ～ 名言にちなんだエッセイです

あうん

教師と生徒・保護者があうんの呼吸で教育ができることを願って‥‥

第 ４１ 号
令和６年１１月２５日

えびフライ、と呟いてみた。

三浦哲郎『盆土産と十七の短篇』

えびフライは、口のなかに入れると、しゃおっ、というような音を立てた――。
東京へ出稼ぎに行った父が、えびフライを携えて帰る「盆土産」ほか、「金色の朝」「春は夜汽車の窓から」「とんかつ」など、 中学・高校の国語教科書で親しまれた名作を中心に編んだ、文庫オリジナル短篇集。川端康成文学賞受賞作「じねんじょ」を収録。自作について綴った随筆三篇を付す。
（Amazon商品説明より転載）

認知症を患って施設にいる 93 歳の僕の母は、いつもにこにこ僕を出迎えてくれる。記憶は認知症発症の時点で止まっている。だから彼女はいまでも 70 歳になったばかりだ。「僕は 60 歳で、母さんは 93 歳だ」というと「そんなになるの？」と驚く。短期記憶に障害があるので、少し経つと同じ会話に戻ってしまう。「今どこにいるの？」「何歳になった？」「結婚したの？」「子どもは？」「私は元気だからそろそろ家に帰るね」そして「今どこにいるの？」という具合だ。「結婚もして子どももいるよ」と答えると「結婚できたの？」と驚く。確認するときは「したの？」ではなく「できたの？」なのがちょっと引っかかるけど、その度に喜ぶ母を見ると「まあ、いいか」と思うのである。

先日、久しぶりに息子、母にしてみれば孫が帰ってきたので会いに行ったところ、もちろん孫のことはすっかり忘れていたが、「家に帰ったら『かたこ餅』を作ってあげる」と言いだした。僕の田舎で「べこ餅」のことを「かたこ餅」と言うのだが、母が元気な頃はお盆や正月になると必ず作って近所に配り、僕にもわざわざ送ってくれたものだった。僕は子どもの時からいやというほど食べてきたので、１個食べるともう十分でそれ以上は食べないのだが、母の作ったものは美味しいと評判だった。

この日の母はいつになく記憶が蘇ったようで、「私は米を粉にするところから始めるんだ。だから美味しい餅ができるんだ」と言って作り方まで話し出した。これには僕もびっくり。そして僕に、「作ったら送ってあげるから住所を教えて」と言う。

どうも世の中の母親という人種は、子どもがちゃんと食べているかを心配する人たちのようだ。僕の大学時代にも、やたらカップラーメンやらパックご飯を送ってよこしたものだった。そういえば「かたこ餅」も送ってよこしたなあ。久しぶりに母の「かたこ餅」が食べたくなってきた。

三浦哲郎さんの短編小説『盆土産』は、中学校の教科書にも掲載されているので読んだことがある人も多いかと思う。えびフライがまだ珍しい食べ物だった頃の話だ。青森から東京に出稼ぎに行った父親がお土産にえびフライを持ってくると言う。それが気になって思わず主人公の少年が「えびフライ」と呟（つぶや）く。津軽弁で「え」と「び」の間に小さな「ん」が入る呟きである。そして、初めて食べるえびフライの味。翌朝に目を覚ましても旨さが舌に残るほどだった。父親が東京に戻る際に「さいなら」と言うつもりでうっかり「えんびフライ」と言ってしまう主人公がいじらしい。小説はそこで終わるのだけれど、あの少年はその後幾度となくえびフライを食べただろうが、それでも最初に口にしたえびフライの味は一生忘れなかったにちがいない。

僕も「かたこ餅」とつぶやいてみる。

母が作ってくれたかたこ餅は、たぶん二度と食べることができないのだけれど、今でもあの素朴な味はしっかり蘇ってくる。